

JICA九州ネット

jqn

第3号

特集 学びの場から

福岡高校は
「フェアトレードを導入しない」
と決めました、みんなで。

私と人間の安全保障

すべての始まりは知ること

JICA九州プチ写真館
バヌアツ共和国

■ 不定期連載 青年海外協力隊報告

つづん トンガへ行く



「お~い、早く！走ってこんか～！！」

小走りになった学生達、飾り付けられた門を次々とくぐっていきます。

だんだん賑やかなお祭りの雰囲気が広がってきました。5月10日、雨の早朝、今日は第61回福高祭。今回の目玉はパネルフォーラムです。

なんと1200人の全校生徒が参加するディベートなのです。

第61回 福高祭

福岡高校は

「フェアトレードを導入しない」

と決めました、みんなで。

日本政府はフェアトレードを推進すべきか？

コロンビア産のコーヒーのうち、5%をフェアトレードにするプランを実行すべきか否か？

体育館中央に配置された席で緊張した面持ちの学生たち。議長の司会のもと、まずは肯定側の立論から始まります。4分間でフェアトレードを導入した場合考えられる「児童労働からの解放」と「コカイン生産の減少」という2つのメリットから賛成を訴えます。それに対し、否定側は2分間で、児童労働のデーターがあるのか？またコカインからコーヒーへ転作するのにどのくらいの期間がかかるのか？と疑問を投げかけます。>>>続く





「いや、こういう現実を知ったからには動かないといけない、肯定側を応援する!」など途切れることなく発言が続きます。この一般質疑の間に意見を練り上げる肯定側と否定側、渾身の最終総括を行います。そして審判員の先生たちと全校生徒による賛否投票が行われ、結果発表を待つ会場に…否定側の勝利が告げられました。

結果は否定側の優勢となりました、参加している学生は、なんと活き活きした表情をしているのでしょうか。誰もが20名の学生たちの成長を感じずにはいられません。実は、このパネルフォーラムは、福岡高校の先生たちから、正義感が一番つよい思春期の青年たちへ「知って考え、魂へ働きかける贈り物」でした。仕掛け人である鹿野敬文先生はゆっくりと全員に話しかけます。「私たちの豊かな生活の背後にある、途上国の子供たちの実態を知り、その子たちのために何かを考える経験で、人は育ちます。フェアトレードという難しい問題を真剣に考え、伝え、受け止め、聞く。こんな場が日本のどこにあるんでしょう」。

ディベートを組み立てる上で、多くの外部講師の講演を聞き、ユニセフなどを訪問しました。私、北九州国際協力推進員の高田順子も青年海外協力隊参加者の立場からコロンビアの話やコーヒーと児童労働についての講演をさせていただきました。また、立論や反駁方法は弁護士の指導を受け、休日返上で勉強会を開催、10回以上にもわたるディベートの練習を行ってきました。そうして出来上がったディベートだったのです。

梅雨空の広がる今も、福高祭で彼らが販売していたフェアトレードコーヒーを飲みながら、福岡高校の学生達のあの堂々としたディベートの姿を思い出す今日この頃です。

JICA国際協力推進員 北九州 高田順子

■そして否定側の立論です。フェアトレード商品が売れる場合と売れない場合の2通りの可能性を考え、売れる場合は「モノカルチャーへの依存」売れ残る場合は「コーヒーに関わる人々の更なる苦難」の2点で反対を訴えます。それに対し肯定側は「モノカルチャーで起こる悲劇は最低価格の設定がないからではないか?」また「イギリスやスイスなどフェアトレードが認知されている国があること」をあげて反論します。

否定側、攻撃の3分間。「悲惨な児童労働が実存する根拠がないこと」や、「貧しいからこそコカイン栽培をする、コカイン栽培は減少しない」と主張します。肯定側の攻撃。「日本企業のCSRへの取り組み」や、他国の事例を挙げて「フェアトレードの日本での可能性」、「最低価格の設定によるモノカルチャーへの対応」で反撃していきます。

ここで、このディベートを聞いている学生達からの一般質疑が入ります。「コカインからコーヒーへ転作する期間、職がなくなる子供たちはどうするのか?」「コーヒーは嗜好品だから安さを求めるのではないか?中身が同じ豆なのにわざわざ高い豆を買うだろうか?」



フェアトレードを話す高校生の語

特集 学びの場から

私と人間の安全保障

2003年、国連難民高等弁務官として活躍された緒方貞子氏がJICA理事長に就任しました。そしてJICAが国際協力事業の遂行にあたり、3つの心がけを提唱しました。その二つ目に「人間の安全保障の観点を取り入れること」があります。(ちなみに、第一は現場重視、第三は事業の効率化です)「人間の安全保障」、それは、新たな様相を見せる世界の深刻な状況に対応するため、「国家の安全保障」のように従来の国を単位とした枠組みでは不十分であり、人々に直接焦点を当てた発想が必要であるという考え方です。JICAの支援活動の成果が着実に1人ひとりに届くことを目指すということです。「ちょっと難しいな」とお思いでですか?でもいました。福岡にこの分野の研究がしたい!という若者がいました。JICA九州図書室で熱心に資料を探す彼に話を聞いてみました。

■「発展途上国の人々」という言葉

人間の安全保障に興味を持つようになった最初のきっかけは学部の3・4年時のスウェーデン留学でした。教育大学に籍を置いていた私は、それまではただ漠然と「将来は教師かなあ」なんて考えていました。協定校への留学の動機も行く前までは外国語を磨きたい程度にしか考えておらず、留学に対する計画性や学究的態度は0。当時の自分の無謀さといつたら思い返すだけで冷や汗がでるほどです。留学前から持ち合っていた唯一のモチベーションだった語学力の向上も最初は思うようにはいきませんでした。自分なりには一生懸命勉強しているつもりなのに上達の実感がつかめないまま、話しても伝わらない、聞いても理解できない、という期間がおよそ半年近く続いていました。あのときは精神的にかなり参っていましたね。

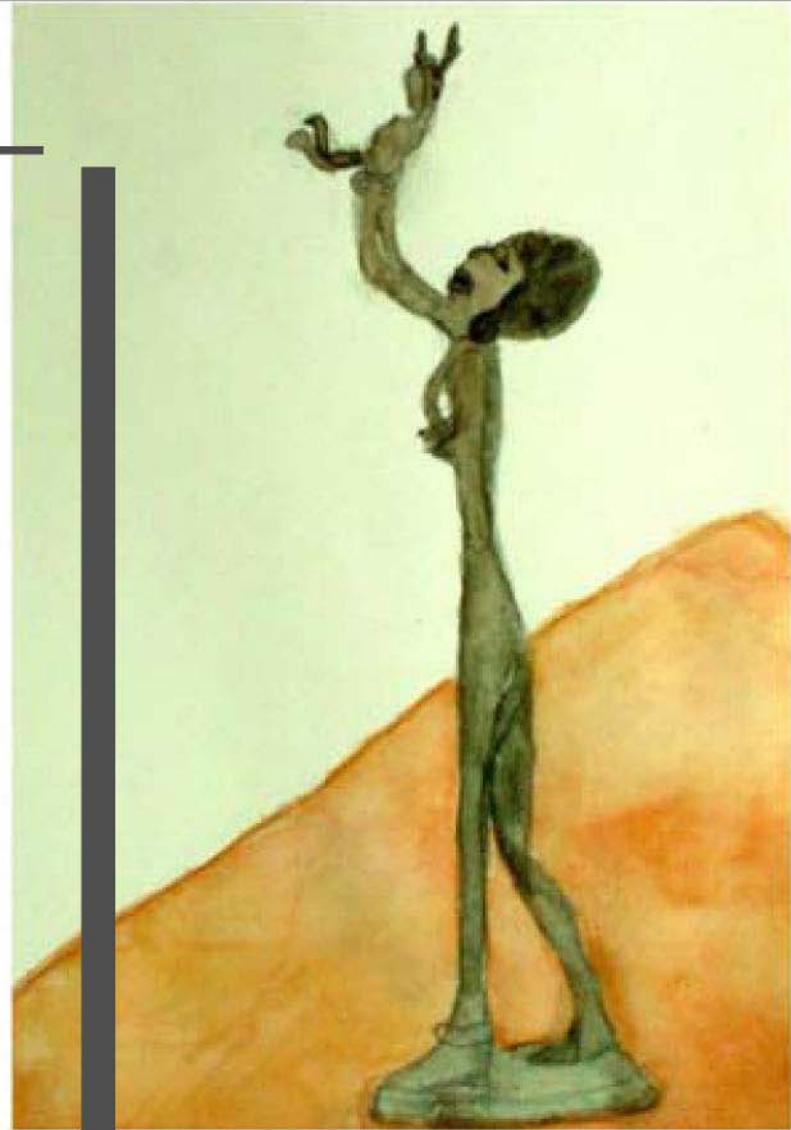
ようやく海外での生活にも慣れてきた後半、私はそのスウェーデンの大学でPeace-and Development Program(平和と開発プログラム)というコースを受講し、開発の理論的な部分を学びました。例えば、近代化論や従属理論、人間開発指数の算出方法などです。中でもそのプログラムで、インド出身の経済学者で、1998年にはノーベル経済学賞も受賞したアマルティニアーセンのDevelopment as Freedom(邦訳:『自由と経済開発』)をテキストとして使用したことはこの後の進路の決定に影響したといえます。自由や開発、貧困といったこの分野を学ぶにあたって頻繁に使う用語の本質について再考する機会をその本は与えてくれました。

2007年3月に帰国してからは、これまで学んできたことをさらに深めるために大学院への進学を目指しました。そして、大学院を目指すからには当然、これから深めていきたいというテーマが必要になります。そして、そのテーマを研究するためにどこの大学院に進むかということも大変重要です。私の場合、これまで開発について学んできたうえで抱いていたある一つの疑問が出発点となりました。それは、"発展途上国の人々"という言葉が個人で構成される集団よりも、まるで実体のない抽象的な概念のように捉えられてしまっているのではないか、という疑問です。 >>>つづく



挿絵：福岡県中間市の小学生の皆さんに描いていただきました。
どうもありがとうございます。

人間の安全保障



九州にある図書館を大いに活用させていただきました。大学の図書館では手に入らなかった参考文献はもちろんのこと、人間の安全保障に関するビデオやDVDまで借用することができ、それらは論文執筆だけでなく、専門科目の筆記試験の準備にも役立ちました。また、職員の方々は突然やってきた大学生に対してもとてもフレンドリーに接してくれて、その際国際協力に関する興味深い話をいくつも聞かせてくれました。そうした周囲からのサポートもあって、無事に大学院にも合格でき、2008年4月からは東京大学で、これから国際協力の理念、行動方針として、プレゼンスが高まっていくことが予想される人間の安全保障の概念と正面から向き合って研究に取り組んでいます。このハイレベルな研究環境で様々な刺激を受けながら自分を磨き、将来は人間の安全保障分野の研究者として国際社会に貢献していきたいです。今はまだ深淵なる学問の世界に片足のつま先を突っ込んだ程度ですが…。

■国際社会を読み解くための視座

言葉自体にはそのような含みはないにしても、どうしても“発展途上国の人々”が“個々人の集まり”だということが私たちは忘れてしまいがちだと思います。彼らもまた、両親から祝福されてこの世に生まれ、名前を授けられ、そしてそれが他とは異なるアイデンティティを有しながら生きています。彼らにも幸福に生きる権利があるはずなのに…。

実際には自分も発展途上国の就学率や平均寿命、GDPなどの数値のみでその国に住む人々のことをある程度理解した気になっていました。しかし、物事は、当然、そんなに単純ではありません。私は自分のそうした表面的で想像力の欠けた態度を省み、そして国際社会を読み解くための別の視座を学ぶ必要性を感じていました。

そんな時にたまたま見つけたが東京大学大学院の総合文化研究科にある人間の安全保障プログラムです。実際、“人間の安全保障”という言葉に出会ったのはこの時でした。“一人ひとりの中核にある自由を守る”、というこのヒューマニズムに溢れる人間の安全保障の概念に魅力を感じるとともに、ここでなら自分の抱いていた疑問に深く切り込んでいくのではないか、と考えました。また、留学時代から慣れ親しんだ(?)アマルティア=センが概念構築に深く関わっているということも少し後になって知り、“人間の安全保障”という分野を学ぶことが自分にとって自然で納得のいく選択だと思うようになりました。

さて、大学院に進むと決心することと志望先に合格することはまた別の問題です。大学院に進むには入学試験があり、当たり前ですが合格するためにはそれなりの準備と対策が必要となります。このプログラムでは、英語(TOEFLのスコア提出)や人間の安全保障に関する専門科目の筆記試験、そして論文の提出などが入学試験として課されていました。受験勉強に取り組むにあたって、私はJICA

5月に横浜でTICAD IV アフリカ開発会議が開催され、今、アフリカ大陸に注目されています。JICAもアフリカで様々な支援プロジェクトを展開したり、多岐にわたる分野の研修にアフリカの方々をお招きしています。しかし、身近な生活の中にアフリカを意識することは、それほど多くはありません。日本とアフリカのつながり?どんなところにあるのでしょうか?そんなことを考えていたら、JICA九州の図書室にタンザニアやジンバブエの資料を探しに主婦の方が来てくださいました。いったい何者なのでしょう?お話を聞いてみました。

郷育カレッジ、これは福津市が主催する生涯学習講座の名称です。様々な分野の講座の中で、私達「多文化交流会ラスルーツ」は国際交流の講座のコーディネーターをしています。主婦3人のボランティアグループで来日中の留学生やその家族の方たちを福津市に招いて、講演会や料理講習会・コンサートなどを企画・実施してきました。今まででは比較的アジア・中東の方々との交流が多かったのですが、今年3月にタンザニアからの留学生に講演会をしていただき、改めてアフリカに注目する機会を持つことができました。日本人にとっても馴染みの深いキリマンジャロとサファリ。しかしタンザニアを走る車の多くが日本製であるとか、輸出入の相手国として日本は常に上位にあるということを知り、更に森林を中心とする環境保護のノウハウを日本から学んでいると聞いて聴講していた方々もタンザニアという国に一気に親近感を感じているようでした。市民レベルの活動では、なかなかアフリカの現状について直接話を聞く機会は少ない



すべての始まりは
知ること



左上:タンザニアの留学生と今回のコーディネートを担当した増井久美子さん、木本圭子さん、土戸淳子さん

のですが、今回の企画を通して、アフリカ大陸諸国が元気になるということは、そのまま世界が元気になることに繋がっていくように感じました。また支援の必要性を感じ積極的に行動を起こすためには、まず「知る」ということがすべての始まりだと思います。

今回タンザニアの資料収集のために、JICA九州にもご協力頂き、福津市のみなさんにいろいろな情報を提供することができました。7月にはジンバブエの講演会も予定しています。出来ることからひとつずつ、草の根の様な活動を今後も続けていけたら、と思っています。

福津市:郷育カレッジ
健康福祉、ふるさと、子育て、
生きがい、環境、国際交流などの分野で大人も子供も楽しく学べる講座を開催。単位を修得していくと郷育スペシャリストの称号が与えらる。

JICA九州 図書室は一般に公開されています。

平日12:00~20:00開館。
国際協力・国際交流の分野から開発教育や環境関連書籍などを所蔵。
ぜひご利用ください。
お問い合わせは jicakic-lib@jica.go.jp まで。

特集 字びの場から

つっつん トンガへ行く

トンガ、最初の印象は…

☆第1位 南国なのに・・・

☆第2位 フレンドリーアイランドと呼ばれているけど…

☆第3位 物価が…

☆第4位 トンガ料理は…

☆第5位 トンガタイムとは…

☆第6位 歌…

マーローエレレイ！

前回は長野県駒ヶ根市からの報告で

したが、今回は2回目にして早くも日本を離れ任国トンガ王国からの報告です。時が経つのは早いですね。

ところで、皆さん実際にトンガがどこにあるかご存知でしょうか。

派遣前の僕に、友達は言いました、

「アフリカに行くんだって？大変だね。」

：違います。トンガはアフリカにはありません。トンガは南太平洋に浮かぶ、ニュージーランドから東に飛行機で3時間程行ったところにある島国です。

この機会にぜひ覚えてください。
さて、早速本題に入りましょう。

■ あらすじ

JICA九州のある九州国際センターのフロント業務をしていた、「つっつん」と筒井慎之助、一大決心の末、協力隊に参加、日本語講師として南太平洋・トンガへ赴任することになりました。長野県駒ヶ根での厳しい研修を終え、ついにトンガの地へ降り立った慎之助、着いたとたんに高熱で倒れます。なんで？大丈夫か、シンノスケ！まさかデング熱!?差し迫る緊迫感の中、それほど緊張感のないレポートが届きました。





「トンガはフレンドリー・アイランドと呼ばれています。

道を歩いていたら知らない人でも、

トング人は素敵な笑顔で

挨拶してくれます。」

どうでしょう。トンガに対する印象がこの3ヶ月だけでもだいぶ変わったのが分かると思います。トンガは季節が日本とは逆なので今ちょうど冬にあたります。雪は降らないにしても、夜は息が白くなるくらいに寒いです。日本を出るときに、必要ないだろうけど念のためにと思って持つてきたジャンパーが今大活躍しています。自分が派遣された学校でもたくさんの生徒が風邪をひいているようなのでトンガ人も寒いみたいですね。トンガはフレンドリーアイランドと呼ばれています。道を歩いていたら知らない人でも、トン

4) トンガ料理は胃にもたれる。
5) 時間はいい加減(トンガタイム)
6) 歌が好き

では、3ヶ月目の印象です。

1) 朝、夜が特に寒い

2) 受け入れられるととても親身に

3) 食事に招待してもらうことがほとんどの場合
物をあまりしなくなつた

4) 最近胃にもたれなくなつてきました
5) 自分も少しトンガタイム

うじ2ヶ月が経つたところです。

トンガでの短いようで長い3ヶ月、トンガに対する印象もだいぶ変わりました。では、トンガに来て1ヶ月目と今現在3ヶ月目でトンガへの印象がどのように変わったのか見てみましょう。

トンガ1ヶ月目の印象。

1) 南の国にしては寒い

2) フレンチ・リーアイランドと呼ばれるわりに、それ程フレンチリーリーじゃない

3) 物価が結構高い

たら、突然高熱が出て1週間寝込むことになりました。ちょうどビトンガでは Dengue 热が流行って いるところで、隊員の中にも Dengue 热にかかっている隊員もいたので、自分も Dengue 热ではないかと心配されました。診察の結果、ウイルス性の熱ということで大事になることもなく1週間で熱も下がりました。熱に悩まされながらも「ああ、これぞ協力隊」なんて思つたりなんかもしましたが 39℃ の熱はさすがにきつかったですね。そして熱も下がり、派遣先での生活が始まり、今ちは

トンガに来てから3ヶ月が経ちました。本当に早かったです。最初、3週間はJICA隊員ドミトリーで他の隊員と生活をしながらのトンガ語のレッスン。それが終わり、ようやく待ちに待つた日本語教師としての活動が始まる!と思つ

トンガ人は時間はルースです。そうじゃないトンガ人もいますが、きわめて少數です。これがトンガタイムです。まあ、トンガ人が遅れてくるからといってイララするわけでもなく、そんなものだと割り切つて最近は自分も少し遅めに行動しています。それでも、よく「早いねー」なんて言われます。

最後にトンガ人は歌が好きです。毎週日曜日には、町のいろんな教会から素敵なかが声が聞こえてきますし、僕の派遣された学校は教会系の学校なので、生徒は日常的に歌の練習をしています。驚くのが、生徒に日本の歌を教えるとすぐにハーモニー・パートを作ってしまうということです。どんな曲でも、主旋律を歌う人、高音パート歌う人、低音パートを歌う人に生徒が勝手に分かれます。本当にきれいなので皆さんにお聞かせできないのが残念です。ただ、授業中に歌を教えると生徒が歌しか歌わなくなつて授業が進まないのが玉に瑕です。

今回はトンガの生活にスポットを当てて報告しました。次回は僕の派遣されたトウポウカレッジについて報告でなければと思います。トンガはこれからが冬本番。風邪をひかないよう気をつけて活動をがんばりたいと思います。トキシオ！（ではまた！）

本当によくしてくれるようになりました。食事にも誘ってくれるし、うちに遊びに来てくれます。日本語で挨拶してくれる同僚もいてうれしくなります。

トンガの物価事情は、そのほとんどが輸入に頼つてることもあり、結構高いです。牛乳、卵などは日本よりも高いくらいです。ただ、最近は同僚の先生のうちで食事をお呼ばれすることが多くなったので、ほとんど自分で買い物をすることが多くなってきました。しかし、トンガ人の基本的な食事は、主食であるイモ類と脂肪の多い肉類(特にシビと呼ばれる羊の肉)がほとんどで、最初のころはトンガ料理を食べるといつも胃がもたれしていました。このシビ、ほとんどがニュージーランドから輸入されているようなんですが、脂肪が多く体に悪いのでニュージーでは食べるのが禁止されているそうです。その事實をほとんどのトンガ人が知らないということにさらに驚かされてしまいます。でも、トンガ人はこのシビが大好きです。食事に招待されても、僕もこの肉を大量に食べてします。

か人は素敵な笑顔で挨拶してくれます。でも、意外と外国人には無関心なところもあり、最初はフレンドリーさを感じることはあまりありませんでした。しかし、日本語教師としての活動が始まり、トンガ人の中で生活するようになると、みんなが

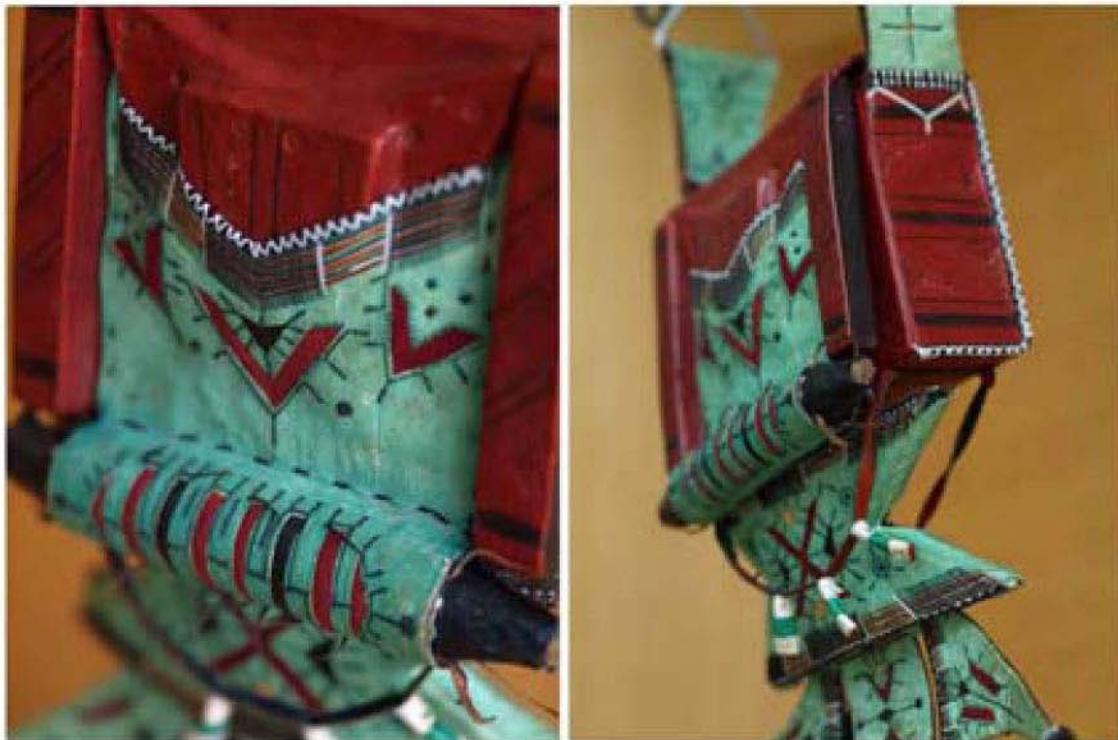


JICA九州チラ写真展

南太平洋の島国、バヌアツ。その国でも離島といわれるフツナ島に伝わる伝統の保存食「プトンギ」を商品化し、現金収入を得る方法として活用することで、出稼ぎによる島の人々の流出防止と、伝統文化継承を図るプロジェクトが北九州市立大学を中心に実施されています。

「フツナ島村落経済開発」プロジェクトはJICA草の根技術協力事業の一環として、同大学の竹川大介教授(人類学)とゼミの学生らが作る「九州フィールドワーク研究会」が三年計画で実行します。トビウオをココナツなどの葉で包んで燻製にする伝統食「プトンギ」の商品化に向け、現地住民と協力して市場調査を実施、まずは首都ポートビラへの出荷を目指します。

バヌアツ共和国
Republic of Vanuatu
特集 学びの場から



ニジェールの民芸品です。前掛けバックだと思います。ちょうど目と鼻と口のような三角模様が顔のようで、何かのキャラクターみたいですね。顔?の部分が箱になつていて中に何か入れることができます。

JICA九州ではこのような民芸品の貸出を行っています。詳しくはjicakic-lib@jica.go.jpまで。

ニジェールのあるサハラ砂漠より南側のアフリカ大陸では、世界の乳幼児死亡の半分以上が集中すると言われています。JICAでは、熊本の国際保健医療交流センターなどのご協力で「子どもの死亡削減と国際協力」研修を行いました。研修員は母子手帳のシステムや健康相談サービスなど自治体の取組み、小児救急医療、心身障害児医療などの現場を視察、また日本の医療保健制度や小児医療の講義に参加しました。1950年ごろは乳児1000人に対して60人も死亡する割合であった日本は2000年には3人程度までに削減することに成功しています。この技術や経験はアフリカを含む多くの国々に伝わっていきます。